

周遊型展覧会＋パフォーマンス「ひとひのうた」 展覧会制作ノート:まだ見ぬ空間の未来・イメージについて

蔵王うたのみち

参加アーティスト:伊藤紺、前野健太

会場:蔵王温泉各所(22ヶ所)

「歌人 斎藤茂吉 蔵王文学のみち」から

周遊型展覧会＋パフォーマンス「ひとひのうた」は、東北芸術工科大学と蔵王温泉の屋内合計6ヶ所をめぐる展示と、蔵王温泉の屋外合計22ヶ所をめぐる展示が並行して行われています。発想のおおもとは、蔵王に、歌人・斎藤茂吉の歌碑合計20基・21首をめぐるルート「歌人 斎藤茂吉 蔵王文学のみち」が整備されていたことでした。2018(平成30)年、蔵王温泉観光協会と山形市観光協会によって整備され、斎藤茂吉が生前唯一建立を認めた熊野岳山頂の歌碑「陸奥をふたわけざまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ」(1934年)も含め、その全体がエリアに応じて「山の歌碑」(6基・6首)、「湯の歌碑」(13基・14首)、「麓の歌碑」(1基・1首)と名づけられています。そのうち、「湯の歌碑」13基・14首をめぐると、蔵王温泉街をぐるりと一周することができるようになっています。そのことから、山形ビエンナーレ2024の蔵王温泉エリアは、「湯の歌碑」めぐりをベースにして全体を設計することに決めました。そして、その際の重要なプログラムのひとつが、現在のアーティストに、現在の蔵王にお越しいただき、新しく、「うた」(短歌、詩、歌)をつくっていただくことでした。

斎藤茂吉は、1882(明治15)年5月14日、山形県南村山郡金瓶村(現・上山市金瓶)に生まれ、生涯に詠んだ短歌は1万8千首余りに及びますが、1953(昭和28)年2月25日に亡くなっています。以来、71年が経ち、蔵王をめぐる状況・気候も変化しました。2024(令和6)年の蔵王のうたがあるとしたら、それは一体どんなものだろうか。いまの蔵王で、いまのうたをつくっていただくことで、斎藤茂吉の生きた時代の蔵王と現在の蔵王を繋ぐことができるのではないか、と思いました。

アーティストとその作品について

そのような意図から、「蔵王うたのみち」と題する展示では、歌人・伊藤紺さんによる短歌11作品と、シンガーソングライター・前野健太さんによる詩・歌11作品を、デザイナー・平野篤史さんによるデザイン、アイデアのもと、山交バス蔵王温泉バスターミナルから嶋の谷地沼までの合計22ヶ所で展示しています。

前野さんが蔵王を訪れたのは、2024年1月中旬のこと。この年の冬は、拍子抜けするほど山形市内の降雪が少なかったのですが、標高880メートルを超える蔵王温泉は違って、吹雪くなか、前野さんはアウターに小さなメモ帳とペンを備えて、蔵王をひとり歩いてくださいました。前野さんは詩作にあたって、とにかく歩きます。かつて、こんなことを書かれていました。

まず喫茶店を探します。ノートを広げます。コーヒーを飲みながら窓の外を眺めます。ここに来るまでに見たもの、聞いたことなんかをノートに書いていきます。以上。大枠は本当にこれだけです。あとは印象に残ったこと、出会い。これも歩いて足で稼いで自分からぶつかりに行く、歌にぶつかりに行くという感じです。迎えに行くとき書きましたがぶつかりに行く。歌との衝突を招き入れに行くんですね。そのためにとにかく歩きます。
(前野健太「詩の生まれるところ」『HOME/TOWN』左右社、2021年)

今回制作いただいた前野さんの詩・歌は、前野さんが、とにかく歩き、風景や人との出会いの中で産声を上げたものです。厳しい冬の季節のなかで見出された風景が、どのような詩・歌となったのでしょうか。

伊藤さんが最初に蔵王を訪れたのは、2024年2月中旬のこと。このとき、詩人・管啓次郎さんの呼びかけで、山形ビエンナーレ2024に関わる10数名で東北芸術工科大学から蔵王温泉まで約15キロを歩きました。幸運なことに、降雪がなく、道路を歩きやすいタイミング。伊藤さんは、この長い道のりを踏破し、さらに、蔵王の季節もようやく春になろうとする5月上旬にもお越しいただきました。5月の際には、蔵王の御釜もご覧いただいています。

そのため、今回制作いただいた伊藤さんの短歌には、複数の季節が見つけられるでしょう。スキー客で賑わう冬と、夏を目前に控え、緑の芽吹く静かな春。季節の起伏を体験され、それがうたになっていることが、全体を通して伊藤さんの短歌を鑑賞するとき、いっそうあらわれていると感じます。

いくつもの時間・季節・風景・感情をめぐる、「うた」のあとさき

蔵王を歩き、確かな体感を得て、生粋の言葉によって描写された蔵王の風景・光景と、人の感情。伊藤さんによる短歌、前野さんによる詩・歌は、ふたりがそれぞれ、蔵王という土地・自然・環境を見つめ、それらと人との関係、人の営みにも注目しながら制作されたことが伝わってくるものです。

今回、伊藤さんと前野さんの作品は、いずれも、筆者から屋外展示場所・構成の提案をさせていただき、平野さんにデザインをしていただきました。短歌、詩という言葉の表現は、その意匠によって、作品から受ける印象が大きく変化する可能性があります。歌集・詩集という本の形態でももちろんのこと、屋外での造形物として展示される本展では、フォント(書体)は言うに及ばず、素材、質感、形態、色彩、サイズ等々、いくつもの要素から検討されなければなりません。はたまた、展示される場所の環境に対し、同調しようとするのか、違和感をつくりだすのか…。伊藤さん、前野さんが見つめた蔵王からつくられた、22点の短歌・詩・歌が、蔵王の風景にどのように還っていったのか？ 平野さんのデザインを通し、ご鑑賞いただきたいと思っています。

ところで、「うた」は、その内容と鑑賞時の季節・時間に、ズレがある場合があります。例えば、斎藤茂吉の短歌に、「たましひを育みますと聳えたつ蔵王のやまの朝雪げむり」という一首があり、和歌の宿わかまつやに歌碑が建立されています。朝の時分、冬の季節のことを詠った作品ですが、鑑賞時は必ずしもその状況ではないでしょう。皆さんが、伊藤さん、前野さんの作品に出遭ったときも、作品——言葉に表現されている季節・時間は、現在の蔵王から連想されるものではないかもしれません。

しかし、大切なことは、それらがかつて、確かにここで見出された風景・光景・感情であるということ。うたは、季節・時間を飛び越え、ただ「うた」そのものとして、ダイレクトに皆さんの内側へと入っていきます。ぜひ、いくつもの時間、いくつもの季節、いくつもの風景、いくつもの感情に、ここ、蔵王を歩き、触れてください。

2024年8月19日

総合キュレーター: 小金沢智(東北芸術工科大学専任講師)